



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リカアドにおける價值論の修正について
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學 經濟學研究, 2, 119-140
Issue Date	1952
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30985
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P119-140.pdf



リカアドにおける價值論の修正について

石 垣 博 美

一

マルクスは、リカアドオ學派の解消の敘述の末尾にこういつている。「リカアドオ學派の全敘述は、この學派が次の二點において解消することを示している。(1)剩餘價值の法則に照應するところの、資本と勞働との交換、(2)一般的利潤率の形成、剩餘價值と利潤との同一視、價值と生産價格との關係についての無理解。」ここにみられる二つのものは、いづれもリカアドオ學派の根本的缺陷であり、それゆえにこの學派を解體させる契機となつたものであるが、勿論これらの缺陷ははじめから未解決な問題として與えられていたわけではなく、古典經濟學の流れにおける個々の學說を通して浮び上つてきたものである。そしていうまでもなく兩者は無關係に存在するものではないけれども、これをリカアドオの經濟學だけについてみるならば、かれは第二の點、すなわち價值と生産價格との關係についての問題を主として考察しているのであつて、第一の點、すなわち資本と勞働との交換の問題についてはほとんど取り扱っていない。これに主たる關心を寄せたのはむしろスミスである。そこで、リカアドオの經濟學をテーマとした本稿に

おいては、かれが主力を傾けて分析した第二の點、すなわちその修正論をめぐつて考察することとし、第一の點については必要な限りにおいて觸れるにとどめたい。

さてリカードの價值論を検討するに先だつて、簡單にスミスが價值と生産價格との關聯について考察しているところをふりかえつてみよう。知られるとおりスミスによれば、一般の商品の價值は投下労働量によつて決定されるが、しかし資本制社會においては商品價值は賃銀、利潤ならびに地代によつて構成され、それは投下労働量よりも大なる労働量を支配しうるものと解される。けれどもかれは資本制社會においても、投下労働量による價值規定を全然捨て去つてゐるわけではなく、しばしば賃銀、利潤ならびに地代をば商品の分解部分であるといつてゐる。こうした混亂がもつともよく示されてゐる言葉を、スミスから引用してみよう。

「すべての特定の物品の價格、すなわち、交換價值は、各々別に取つてみれば、右の三つの構成部分のうちどれか一つまたは、すべてに分解するのであるから、各國の労働の年々の生産物の全部を構成してゐるところのあらゆる物品の價格もまた、全體としてみれば、この三つの部分に分解し、彼等の労働の賃銀、彼等の資本の利潤、または彼等の土地の地代として、その國の種々の住民の間に分解されなければならない。……賃銀、利潤、そして地代は、一さの交換價值の根本的源泉であると同時に、すべての收入の根本的源泉である。」²⁾

このように一方においては労働量による價值規定を保持しながら、他方においては收入合計による價值規定を主張するといふ、スミスにおける價值規定の混亂は、明らかにかれが價值と生産價格とを混同してゐることを示してゐる。賃銀、利潤ならびに地代等の收入が商品價值とは無關係に決定され、しかる後にそれらが商品の交換價值を規定するという生産費説にとどまるかぎり、スミスはこの場合現實の競争によつてつくり出される生産價格を考へてゐるのである。もつともかれが價值規定の二元の間に動搖したのは、全然理由のないことではなく、後にふれるようにこの

混亂の背後にはスミス固有の問題、すなわち資本と労働との交換の問題にたいする配慮がひそんでいた。しかしそれにしても、スミスは、收入合計による價值規定自身から當然推論されるように、賃銀の變動が商品の價值に影響を及ぼすという誤れる結論におちいつたのである。

註(1) Karl Marx, "Theorien über den Mehrwert", 1923, III S. 280 (邦譯改造社全集版第十一卷二八五ページ)

(2) Adam Smith, "Wealth of Nations", (大内兵衛譯第一編第六章一〇八一—一〇九二ページ)

二

以上のようにスミスは價值と生産價格との區別を明確にしないでなく、だいいち問題としてほとんど取りあげなかつたのであるが、これに反してリカードはスミスにおける價值規定の動搖のなから労働價值説のみを取り出してこれを純粹化するとともに、生産價格に特有な性質を説明しているのである。そこでこの點をもつと詳細に考察してみよう。

周知のようにリカードは價值論の冒頭において、「一商品の價值、もしくはこれと交換される他の商品の數量は、その生産に必要な相對的労働量によつてきまり、その労働にたいして支拂われる報償の多少によつてきまるものではない。」と述べて、スミスが労働量による價值規定と労働の價值による價值規定すなわち支配労働量による價值規定との二元的立場に動搖している矛盾を指摘したが、同時にまたかれは、労働の價值と労働量とをいちおう明確に識別することによつて労働價值説の根本的立場を基礎づける功績を果した。そしてかれは次のようにいう。

「労働賃銀の變動は、これら諸貨物の相對的價值に何ら變動をひき起しうべきものではない。何故ならばかりにそ

それが騰貴したとしても、單により高い價格を支拂われるというに止まつて、これら職業のいづれにおいても要せらるる勞働の量を少しも増加しない。」

これをいいかえれば、一商品に含まれている勞働量はこの勞働量のうちどれだけが勞働賃銀として勞働者に與えられるかによつては全然影響されることなく、したがつて勞働量による價值規定が勞働賃銀を基礎とする資本制社會に妥當しないという理由は存在しないと主張するかぎり、リカアドはまさしくスミスの弱點をついたのである。けれどもその反面に、リカアドは勞働量と勞働の價值との區別、すなわち資本制生産では一商品の價值はその生産に必要な勞働にたいして支拂われる價值よりも大きいということ、簡単にいえば費された勞働と支配する勞働とは別ものであるという事實を認めることだけで満足したため、かえつてスミス固有の問題を看過したのであつて、この點においてもマルサスおよびミルにとつてリカアドをそれぞれ攻撃し代辨せんとする試みを生ぜしめたのであつた。その要點を述べればこうである。對象化された勞働が問題である限り、支配する勞働と費された勞働とは相等しく、例えば二時間の勞働を必要とする生産物は市場においてそれと交換される生産物の二時間の勞働を支配する。しかるに資本と勞働との交換になるとはや兩者は等しくない。一商品が購買しうる一定量の勞働はその商品の生産に必要とされた勞働量よりも大きくなければならぬ。したがつてこのことから生きた勞働と資本とが交換される事實にたいして價值法則が妥當しないというスミスの矛盾が生じてきたのである。リカアドも勿論ある商品に費された勞働とこの商品をもつて買いうる勞働量とは同じでない事實を認めてはいたが、この問題を積極的に解決できないまゝに放置することになつた。事實生きた勞働を直接に資本と交換させ、そして勞働力の價值ではなく勞働の價值が支拂われるというふうに考へては、この問題は解決できないのである。

しかしそれはともかく、リカアドは勞働の價值を勞働量からいちおう區別する觀點をもつていたのであつて、そ

れ故にだいたいにおいて正しい労働の價値の規定を展開することができたのである。その賃銀論において、もしもリカアドオが、「労働の自然價格は労働者およびその家族を養うために必要とせられる食物、必需品、便宜品によつてきまり、食料、必需品の價格の騰貴とともに労働の自然價格は騰貴し、その價格の下落とともに労働の自然價格は下落するだろう。」³⁾と述べるだけであつたとすれば、當然循環論におちいることになる。何故ならいまでもなく、労働の價値は生活資料の價値によつてきまるものであるけれども、その生活資料の價値は何によつてきまるかといえは再び労働の價値によつてというよりほかないからであつて、結局スミスと同じ誤りを犯すことになるだろう。そこでかれはさらに進んで次のようにいつている。

「賃銀はその眞實價値によつて、すなわちそれを生産するに投ぜられた労働および資本の分量によつて測定されるべきものであり」⁴⁾、「利潤は賃銀の如何によつて決定せられる。但し名目賃銀によつてではなく、眞實賃銀によつて、すなわち年々労働者に支拂われるボンドの數によつてではなく、これらのボンドを取得するに必要な労働日の數によつて決定される」⁵⁾。

労働と労働力との混同を除けば、ここには労働の價値の決定を、それを生産するに必要な生活資料に要する労働量に歸せしめる正しい賃銀の規定が見出される。ところで一般に剩餘價値の正しい展開は正しい賃銀論を基礎とする。いうまでもなく、一労働日のなかから労働賃銀として労働の平均的消費にはいりこむところの、生活資料の價値に等しい労働時間を差引いて残る時間部分こそ、剩餘價値を形成するものにほかならず、しかもこの關係を一商品の價値形成からみる場合、労働賃銀の等價をなす生活資料と剩餘生産物とを生産するところの労働者の労働が、何よりもまづ全生産の基礎をなすからである。リカアドオはまさしくこの點に關聯して、「賃銀として支拂われるべき割合の如何は、利潤の問題にとつて最も重要な事項である」⁶⁾といつたのである。このようにリカアドオは賃銀をつねに剩

餘價值との關聯において把えてゐるが、それと同時に、兩者の逆比例的關係を正しく指摘してゐる。

「商品の價值全部は、二個の部分にのみ分たれる。一は資本の利潤をなし、一は勞働の賃銀をなすのである。」⁷⁾

「利潤の高低は正しく賃銀のあるいは低く、あるいは高きに比例する。」⁸⁾

一見して明らかのようにリカードは勞働量によつてつくりだされた商品の價值を賃銀と利潤とに分割し、したがつてこの與えられた一定の大いさの價值を勞働の價值と剩餘價值とに分割するのであるから、當然兩者は逆比例的關係にたつ。ところが商品價值は勞働によつて決定されるゆゑに、このことは勞働者が勞働の價值を受けとつて勞働者の生活自身を再生産することを前提としなければ不可能である。したがつて價值分割における決定者は賃銀にほかならず、リカードが例えば「勞働の價值の騰貴は利潤の下落なくしては起り得ない。」といつてゐるのも、この意味に解さなければならない。そしてこのことから當然に歸結されることであるが、かれは賃銀の騰落はたしかに剩餘價值の割合を決定するけれども、商品價值には影響を及ぼさない、いいかえればいかなる賃銀の騰貴も剩餘價值を低下せしめるだけで商品の價值を騰貴せしめることにはならないという結論をひきだす。この結論は、さきに勞働賃銀の多少が商品に含まれている勞働量の大きさに影響しないということを考察したさいに引用したリカードの言葉に明らかである。そしてこの點は賃銀の騰貴が商品價值をそれに比例して高騰せしめるといふスミス以來の俗見にたいし、「かかる見解には何ら根據がないこと」をはじめて明らかにしたリカードの優點である。けだし價值の生産と價值の分割とを明確に區別し、しかも前者が後者によつて規定されるものでないことを指摘することができたからである。

以上のようなリカードの見解を通じてわれわれの知り得たことは、賃銀の變動は剩餘價值の大いさに影響するがしかし價值には影響しないということであつた。ところが後述するようにリカードは、資本の有機的構成が異なる

場合に賃銀の變動が生産價格に異なる影響を及ぼすということを事實上説明しているのであつて、そうすると明らかにかれは價值と生産價格とが區別されるべきものであることを指摘していることになるだろう。そしてそれはミスが單に價值と生産價格とを混同しているのにたいし、はるかに進んだ兩者の洞察であるといわなければならない。そこで次にリカアドオの生産價格論を取りあげてみよう。

一般に剩餘價值は可變資本によつてつくりだされるものであり、したがつて剩餘價值率を一定とすれば剩餘價值の量はもつぱら可變資本の大きさ、すなわち労働者數に依存する。しかるに利潤率は總資本にたいする剩餘價值の割合として現れるから、剩餘價值量およびその現象形態たる利潤量は同一であるとしても、不變資本部分の差異に應じて當然異なつてくる。また個々の資本の不變資本部分が同一であつても、可變資本部分が異なれば利潤率は一樣でない。したがつて等量の資本が、剩餘價值率を一定としても、有機的構成の差異によつて異なる可變資本から異なる利潤を生み、異なる利潤率を生ぜしめることはいふまでもない。のみならず個々の資本における回轉時間の差異は、等量の資本がつくりだす利潤率にたいして異なる作用を及ぼす。こうした利潤率の差異は各生産部門における資本の運動そのものから生じてくるのであるが、これにたいして等量の資本にたいし等量の利潤を求める資本の競争はこれと直接に矛盾することになる。そこに一般的利潤率がこの矛盾を解決するものとして現れざるをえない根據が與えられる。社會の總剩餘價值をとつてみると、これは當然に社會の總資本にたいして個々の生産部門の間に分配されなければならないが、この分割の割合は社會的總剩餘價值の社會的總資本にたいする比率すなわち一般的利潤率によつて決定されることになる。そうすると一般的利潤率の實現のためには競争を通して價值が生産價格すなわち費用價格プラス平均利潤に轉化することを必要とする。したがつて價值と生産價格とは原則的に異なるという關係に立たざるをえないのである。

リカアドオは勿論こうした價值の生産價格への轉化を理論的に究明しないで、生産價格をもそれ自身として取りあげてゐるわけではない。けれども一般的利潤率の前提のもとでは價值とは異なる生産價格が成立するという事實を正しく整理することができたのであつて、リカアドオは貸銀の騰落が、有機的構成の異なる種々の資本によつて生産される商品の價值に及ぼす影響を取り扱ふと稱して、次のような考察を行つてゐる。

「假りに各労働者の労働に對して年々五〇〇ポンドが支拂われ、したがつて五、〇〇〇ポンドの資本が使用せられ、そして利潤は一割であるとしよう。第一年目の終りにおける各々の機械ならびに穀物の價值はともに五、〇〇〇ポンドとなろう。第二年目において製造家と農家とは、ともに労働の支拂いに再び五、〇〇〇ポンドを投じ、したがつてその生産物を五、五〇〇ポンドに賣るであらう。しかしながら機械を用いるものが農家と同一列に立たんがためには、たゞに労働に投ぜられた五、〇〇〇ポンドという同額の資本に對して五、五〇〇ポンドを收得するのみならず、更に彼等が機械に投じた五、五〇〇ポンドに對する利潤として五五〇なる額をも收得しなければならない。したがつてその生産物は六、〇五〇ポンドに賣られねばならない。だからして資本家はその商品の生産上に年々正確に同一量を投じながら、しかもその生産するところの品物は、各自がそれぞれ使用する固定資本が、即ち蓄積された労働の量が異なるために、その價值を異にするのである。布と綿製品とは等量の労働と等量の固定資本との生産物であるが故にその價值を同じくする。しかるに穀物にいたつてはこれらの商品とはその價值を同じくしない。なぜなれば、穀物は固定資本に關する限り異なつた關係のもとに生産せられたからである。」¹⁰⁾

この例證は明らかにリカアドオがいうような「労働の價值の騰貴」という原因によつて、商品價值が變動することを證明するものではない。むしろ事實上貸銀の變動とは無關係に價值が生産價格に轉化する條件を指摘している點にリカアドオの優點がひそんでいるものといえよう。すなわち、前提によれば機械五、五〇〇ポンドの價值は一部分も

損耗して生産物の價值構成分とならないから、剩餘價值率を一定とすれば、製造家の商品も農業家と同じく價值としては五、五〇〇ポンドでなければならぬ。しかるに利潤率は賃銀部分にたいして計算されず、全資本にたいして計算され、したがつて製造家は五、五〇〇ポンドの機械によつて構成される不變資本部分にも等しく一〇パーセントの利潤を計上することとなり、かくしてその商品は六、〇五〇ポンドで賣られねばならない。この場合リカアドオが、「だからして資本家はその商品の生産に年々正確に同一量の勞働を投じながら、しかもその生産するところの商品は：價值を異にする。」と述べ、兩資本家が同一量の勞働を用いていないこと、たゞ同一量の可變資本を用いているにすぎないことに氣づかなかつたという難點はあるけれども、生産價格が費用價格と平均利潤との和であるかぎり、それは價值とは異なるということを明らかに示しているのである。しかしこゝでは賃銀の變動が「相對的價值」に及ぼす影響は少しも問題にされていない。そこでかれは「これらのものの相對的價值は勞働の價值の騰貴によつていかに影響されるであらうか。」と設問して、おおよそ次のような考察に向う。上に掲げた設例において、假りにいま賃銀の騰貴のために利潤が一〇パーセントから九パーセンに下落するとしたならば、すでに述べたように賃銀の騰貴は商品の價值に影響しないから、製造業者の生産物も農業者のそれとひとしく依然として「共同の價格」たる五、五〇〇ポンドで賣れることになる。ところが製造業者の商品は、「その固定資本にたいする利潤として五五〇ポンドを加える代りに、その價格の九五パーセント即ち四九五ポンドしか加えないであらう。したがつて價格は六、〇五〇ポンドではなくして、五、九九五ポンドで賣れるであらうから、より多くの固定資本の用いられた製造品は、穀物その他の、固定資本がより少なる割合で參加している商品にたいしては相對的に不落するであらう。勞働の騰貴または下落による商品の相對的價值における變動の程度は、使用せられた全資本にたいして固定資本が占める割合如何によつて定まるであらう。」¹³「こゝでリカアドオが明らかにしていることは、要するに賃銀の高騰の結果として、低位な資本の有機的

構成をもつ資本にかんしては商品の生産價格が騰貴し、これにたいして高位な資本の有機的構成をもつ資本にかんしては商品の生産價格が低落するという關係であるが、これによつてリカードは、先にも觸れたとおり賃銀の高騰は利潤を引き下げないで商品の價格を高めるというスミス以來たえず曳きつられてきた誤謬を、よりいつそう明快に克服することができた。このようにかれは生産價格が價值とは異なるという生産價格に特有な性質をはじめて分析したのであつて、これこそリカードの經濟學をして古典經濟學のうちの最高峰たらしめるゆえんである。

ところで以上のような分析を通じてリカードが結論として取りだした命題は、いうまでもなく價值論の修正という形であられたのであつた。そこでつぎにこの點を考察してみよう。

- 註(1) David Ricardo, "Principles of Political Economy and Taxation", Gonnar's ed., p. 5 (邦譯岩波文庫七ページ)
- (2) *ibid.*, p. 22 (二二—二四ページ)
- (3) *ibid.*, p. 70 (七四—七五ページ)
- (4) *ibid.*, p. 42 (四二—四三ページ)
- (5) *ibid.*, p. 124 (一二八—一二九ページ)
- (6) *ibid.*, p. 21 (二二—二三ページ)
- (7) *ibid.*, p. 85 (八五—八六ページ)
- (8) *ibid.*, p. 21 (二二—二三ページ)
- (9) *ibid.*, p. 28 (三〇—三一ページ)
- (10) *ibid.*, pp. 27—28 (二九—三〇ページ)
- (11) *ibid.*, p. 28 (三〇—三一ページ)
- (12) *ibid.*, p. 29 (三一—三二ページ)
- (13) *ibid.*, p. 29 (三一—三二ページ)

すでに述べたようにスミスが労働量による価値規定と收入合計による価値規定との間に動搖したことは、結局価値と生産價格とを同一視した誤りによるものではあるが、しかしこの価値規定の混亂を通してスミスは価値と生産價格とが異なるものである點を暗示したといえよう。いうまでもなくかれは資本制社會の眼前にある商品が生産價格をもつて賣買される事實を認知して、これが労働量によつて規定された価値と直接に矛盾するという困難にぶつかり、兩者を素朴な形のまゝで展開したのである。これにたいしてリカードはスミスの価値規定のうちから労働量による価値規定したがつてまた価値が賃銀、利潤そして地代に分解されるという立場だけを受けついたのであつたが、しかし価値が生産價格に發展する理論的過程を考えなかつたリカードの經濟學には、それゆえはじめからスミスの直面した難問を克服しえない理由がひそんでいたものといえよう。してみるとかれの價值論にははじめから逃がるべからざる明白な矛盾、つまり修正論への必然性があつたといえる。そこでつぎにこの詳細にたちいつて批判的に考察することにした。

便宜上ここで先に「労働の価値の騰貴」が商品の「相對價值」に及ぼす影響を論じたさいにリカードが述べている設例を再びとりあげてみよう。その設例におけるリカードの思考経路はこうである。利潤が一パーセント下がる場合でも農業者の穀物の価値は變らないで依然五、五〇〇ポンドである。なぜならば、この場合は資本の全部が賃銀に支出されているので、その賃銀が騰貴しているだけ利潤が下り全價值は變らないからである。ところが他方製造業者の資本は機械にたいする五、五〇〇ポンドと賃銀にたいする五、〇〇〇ポンドとから成つてゐる。後者はさきの穀物と同様に依然として五〇〇ポンドの価値に實現するが、これに反して後者の五、五〇〇ポンドの運轉にたいしてはも

はや一〇パーセントすなわち五五〇ポンドを實現できない。たゞ九パーセントすなわち四九五ポンドをあげるにすぎないというのである。ところでこの例解のうちにはリカアド經濟學の根本的缺陷がひそんでいるのを見逃してならない。主なるものは第一に平均利潤率とそれによつて規制された生産價格とを前提していること、第二に利潤と剩餘價值との混同、そして第三に價值と生産價格との混同をあげることができる。以下順を追つて説明を加えてみたい。

まづ第一の點を考えるならば、この例解においてリカアドが一〇パーセントという平均利潤率を前提としていることはいうまでもない。もしも製造業者がその商品を従來通りの價值で賣るとしたらかれは平均利潤よりも高い利潤を得ることになるから、機械にたいする利潤は五五〇ポンドではなく四九五ポンドに下落するとリカアドは考えるのであるが、この場合に四九五ポンドという利潤は一〇パーセントの平均利潤によつて規定された機械の生産價格五、五〇〇ポンドの九パーセントにあたり、したがつてかれは明らかに生産價格を前提としているのである。もつともリカアドが平均利潤率したがつてまた生産價格を所與のものとして前提しているのは、この例解だけに限らない。何れにしてもリカアドはいたるところで競争から直接に導かれる平均利潤率を前提して論を進めていくけれどもそれがいかにして成立するかを理論的に處理することができなかったのである。しかしかれも平均利潤率の成立に無關心であつたのではなく、少くともこれを分析しようとする努力を示している。例えば、

「一商品の生産せられる數量は必ずしもつねにこれに對する新たな需要の求めに足りるとは限らないから、その市場價格はその自然價格または必要價格を超えることがあり得る。けれどもそれは一時的な作用にすぎない。この商品の生産に用いられる資本の高い利潤は、當然この産業に資本をひきつける。そして必要なる基金が供給せられてその商品の量が適度に増加するならば、その價格は下落する。そしてこの産業の利潤は一般的な水準に一致するであらう。一般的利潤率の下落は、個々の産業における利潤の部分的な騰貴と決して相容れないものではない。資本がある

事業から他の事業へと移動させられるのは、利潤の不均等にこそよるのである。¹⁾」

ここに見られるリカードの一般的利潤率に關する議論は、それがいかに形成されるかという本質的な問題ではなく、たゞ一般的利潤率を始めから前提しておいて、そしてこれを中心にして價格が運動する外面的現象を観察しているにすぎない。このように、價值を前提するかぎり利潤率は各生産部門において異ならざるをえず、したがつてこれが一般的利潤率に均等化してゆく過程の分析が本來の問題であるにもかかわらず、リカードは所與の一般的利潤率がまづあつて、特殊な生産部門の利潤率がこれを中心として上下するといふ、まさしく逆な研究の仕方をつている。けれども一方においては平均利潤の水準そのものが騰落し、運動することをリカードは指摘している。

「しかし豊饒な土地が十分になく、この追加される量の穀物を生産するために普通よりもより多く資本と勞働とが用いられるならば、穀物はその元の水準まで下落せぬであらう。穀物の自然價格は引上げられるであらうし、農業家は永續的により大なる利潤を取得することはできないで、必要な生活資料の騰貴により勞働賃銀騰貴の必然的結果たるものの、減少した率に甘んずるのほかないであらう。²⁾」

要するにリカードは平均利潤率を無批判的に現實の競争からとり來つてこれを前提し、たゞ平均利潤率が維持され存續されるための一時的現象を説明し、また賃銀の騰貴のためにその水準が下落するということを觀察しているにすぎないのである。もつとも現實の競争現象にかんして、市場價值をうちたてるところの同一の生産部門内の競争をリカードが分析していることは注目しなければならぬ。³⁾ すなわちリカードが差額地代を展開するにあたつて、一般的利潤率にかんする命題とともに必要とした命題は、同一部門の生産物は同一の市場價值で賣られるということ、したがつてこの場合の競争は異なる利潤率を發生せしめるということを意味するものである。しかしこのように異なる利潤率にもかかわらず同一の價值をうちたてるところの同一の生産部門内における競争と、他方において

等しからざる價值をもつところの同一の生産價格を實現させる競争、いいかえれば一般的利潤率を成立せしめる競争との、競争の「二重規定⁴⁾」の把握は、リカアドオにおいてはみられない。

つぎに第二の誤りである利潤と剩餘價值との混同については、あらためて説明するまでもないが、この例解では賃銀の變動によつて影響をうけるのは、賃銀に支出された資本部分であり、したがつて賃銀が騰貴すれば利潤が下がり、價值の分解部分の間の比例が變動するだけである。これは明らかに「労働の價值の騰貴は利潤の下落がなければ不可能である」という前提に基づいている。しかしこの利潤が剩餘價值でなければならぬのは勿論である。労働日が與えられていると前提しても、剩餘價值の法則と利潤の法則とは直接單純に一致するものではない。たゞ全資本が可變資本のみから成ると假定された場合においてのみ、利潤と剩餘價值とは同視することができる。リカアドオは一般にミスにならつてこの假定を設けているし、またこの例解でも農業者の資本は可變資本のみによつて構成されているので、その限りにおいて右にあげた賃銀と利潤に關する命題も正しいのである。この剩餘價值と利潤との混同は、また剩餘價值率と利潤率との混同ともなりリカアドオの理論をしばしば混亂させている。それではこうした混同は何故に生じたか。それはリカアドオの剩餘價值論を考えてみれば直ちに明らかになるだろう。なるほどかれは労働量による價值規定から出發して、剩餘價值の展開を導き出しているけれども、剩餘價值を剩餘價值として把握せずに利潤という言葉によつて理解しているにすぎないのである。しかもリカアドオの剩餘價值論においては、商品としての労働力の規定が明確でなかつたために、結局相對的賃銀に基づく相對的剩餘價值を事實上明らかにしているにすぎず、剩餘價值の根源も性質も不明瞭にならざるをえなかつた。つまり剩餘價值一般がリカアドオには不明なのであるが、しかしその存在には疑いもなく氣づいているのである。ところが一方において資本制社會の皮相から平均利潤をもつてきて、兩者を理論的に一致させようと企てるのであるからして、その媒介的過程を把握しえなかつたりカアドオとし

ては、たゞ兩者を直接的に同視するよりほかに途がない。

第三の誤謬としてあげた價值と生産價格との混同もこれと同斷である。先きにあげた例解において農業者の穀物の價值が依然として五、五〇〇ポンドであるというのは、明らかに「勞働の價值の騰貴は利潤の下落がなければ不可能である」という勞働量による價值規定を前提としている。しかるに他方製造業者の不變資本の價格は平均利潤によつて規制された生産價格であり、これを前提としてこの命題が證明されている。してみれば同じ命題のなかに價值と生産價格とが混在して、リカアドオが兩者を同視していることは明らかである。むしろ兩者を同視することによつて例解を説明しようとしているのである。すなわちまづ最初の前提によつて賃銀の變動は剩餘價值の逆方向への變動を通じて商品價值に影響を與えないことが示されるけれども、後の前提にしたがえばそれは平均利潤の變動から商品の生産價格に影響するといふのであつて、こうした説明の仕方をみるならば、明らかにリカアドオは剩餘價值と平均利潤とを前後においてすりかえているのであつて、これは要するに價值と生産價格とを同一視していることを示すものである。たゞそれにもかかわらず、この命題がいちおう賃銀の變動が生産價格にたいする影響の證明になつてゐるのはいうまでもなく賃銀の變動が生産價格に影響を及ぼさないのは、社會的平均構成の資本にのみあてはまることであるから、リカアドオの例解において賃銀の高騰が價值に影響しないところの農業者の資本は、明らかに社會的平均構成の資本でなければならず、それゆゑにこの利潤は平均利潤と一致し、したがつて剩餘價值と平均利潤も等しくなるからである。

このようにリカアドオにとつては、平均利潤は結果ではなく與えられた前提であり出發點であつた。この點與えられた時代に與えられた國において正常的利潤が存在するというスミスの所説と同じである。ところがスミスはこの事實の前に立ち止まり、商品の價值は收入合計によつて規定されるという結論に到達したのであるが、リカアドオはこ

れに反し、勞働量による價值規定を貫徹しようとして平均利潤の事實と矛盾する事態に追いこまれ、賃銀の變動は生産價格に影響せざるをえないところから、この變動は價值にも影響を及ぼすという價值法則の修正を企てたのであつた。すなわち、價值規定の原則は、「機械その他の固定且つ耐久的な資本の使用のために餘ほど修正を受け」、またそれは「資本の使用者に歸還することの遲速によつても修正される」と。しかしこれを一般的にいなおせば、價值は資本の有機的構成の差異ならびに回轉時間の差異によつて生ずる異なる利潤率が、平均利潤率に均等化するという事實によつて、生産價格に轉化されることにほかならない。けれどもそのさいに價值と生産價格とは異なるものであることに氣づかなかつたりリカアドは、それゆゑに當然この事實を價值法則の修正という形で述べるほかなかつたのである。かようにして現實の競争關係から生ずる一般的利潤率の現象と資本制生産の價值關係とが一見矛盾した形をとつてゐるということが、リカアド體系の難點としてかれをめぐる多くの經濟學者の議論の中心となつたのである。

註(1) Ricardo, *ibid.*, p. 97 (一〇三ページ)

(2) *ibid.*, pp. 97—98 (一〇三ページ)

(3) 「一切の商品の交換價值は、それが製造品であらうと、礦産物であらうと、または土地産物であらうとを問わず、つねに生産上特殊の便宜を有する者だけが享有する最も有利なる事情のもとにおいてそれを生産するに足るところの、より少き勞働量によつて規定せられるものではなく、却つて、かかる便宜を有しない者、即ち最も不利なる事情のもとにおいて生産を繼續する者によつてそれを生産するに必要とせられるところの、より大なる勞働量によつて規定せられるものである。」
ibid., p. 50 (五三—五四ページ)

(4) Marx, “Theorien über den Mehrwert” II S. 60 (邦譯改造社全集版第九卷八四ページ)

(5) Marx, “Kapital” Bd. III S. 230 (長谷部文雄譯第三部第二分冊一二〇ページ)

- (9) Ricardo, *ibid.*, p. 23 (二五ページ)
(E) Ricardo, *ibid.*, p. 32 (三三ページ)

四

リカアドオの價值法則の修正をめぐつて議論を展開した多くの經濟學者のうち、マルサスとミルとは全く對蹠的な地位にたつてゐる。つまり前者は價值を生産價格に解消し、後者は生産價格を價值に解消した。

まづここでマルサスの言葉を引用しよう。「使用される固定資本の量が相違し、かつ耐久性の程度を異にする場合、また使用される流動資本の回収の時期がおなじでない場合に屬する商品種類をしらべてみれば、それは非常な數にのぼるのであつて、その結果法則は例外とみなされ例外は法則とみなされることに氣づくであらう。¹⁾」

リカアドオにたいするマルサスのこの攻撃は、リカドオが例外とみなした生産價格の價值からの背離なる現象が、むしろ「一般の經驗」と合致する通常の現象であることを指摘しているかぎり、正しい命題といわなければならぬ。そこでマルサスはこの「法則」を理論的に裏付けるために價值論を展開する。例えば次のようにいつてゐる。

「勞働および利潤にだけ分解するところの諸商品の交換價值は、それに現實に投ぜられた蓄積勞働と直接勞働に、一切の前拂に對して勞働で見積つた利潤の變化量を加えた結果得られる勞働量によつて正しく測定せられるということである。しかしこの勞働量は……諸商品が支配する勞働量と必然的にひとしくなければならない。²⁾」

この文章から讀みとられることは、マルサスの指摘しているように、第一にマルサスは利潤を商品そのもののうちで解決しようとしてこれを價值の定義の中に取り入れていること、第二に商品はそのうちに含まれているよりも多量

の勞働を支配しうるといふ觀點をかれがもつてゐることである。なるほど第二の觀點、いいかえると資本としての商品はより多量の勞働と交換されるという不等價の交換の過程を、マルサスがとりあげてゐるかぎりでは、リカードオにたいする優點を見出すことができるけれども、それにも拘らずマルサスはリカードオ體系における難點を解決しないで終つた。その理由は次の通りである。さきに述べたマルサスの價值の定義は、後に述べるようにこれをせんじつめると結局商品の價值はそれ自身の價值に利潤を加えたものに等しくなる。してみればかれはここで明らかに商品の價值と資本としての價值増殖とを同一視してゐることになるだろう。なるほど資本としての商品は生きた勞働と交換される場合、それ自身が含むより多量の勞働と交換されるが、しかし一般商品の交換ではそれは事實上あてはまらない。ところがマルサスは、商品がそれ自身の價值に利潤を加えたものに等しいといふ資本と勞働にだけ妥當する法則を、一般的な商品交換の法則に解消してしまつた。それ故にマルクスは、資本と勞働との交換という媒介的過程を指摘したマルサスの「功績は、彼が資本としての貨幣あるいは商品の價值増殖を、すなわち資本としての特殊の機能におけるそれらの價值を商品としての商品の價值と混同することによつて台無しにせられる⁴⁾」と評してゐる。このようにマルサスは資本と勞働との交換の法則を一般商品の交換にひきなおそうとするのであるから、あらかじめ商品の價值のうちに利潤を含ませる前提を作らなければならない。そこでかれは商品の價值は、それが支配する勞働量すなわち投下勞働量に利潤として見積られた勞働量を加えたものに等しいと結論づけるのである。だが大事なことは、こういう操作によつて剩餘價值および利潤の成立を教える根據が消滅してしまうことなのである。マルサスが意識的にこれをやつたことは、リカードオがスミスにたいして提起した、勞働の價值と勞働量との區別を消滅しようとする試みのなかに明らかである。

「およそ一定量の勞働は、これを支配する、またはこれと現實に交換せられる賃銀と同じ價值でなければならない

ということば、たゞちに是認せられる自明の原理だと考えていい。」

このように一定量の労働と労働の価値とをたゞ等置することによつて、マルサスは生産過程における利潤の出所を不可能ならしめるとともに、利潤をば賃銀とともに生産費の一項目と考えて、積極的に生産費説を主張したのであつた。したがつてマルサスの議論の特徴は、スミスにおける生産費説の見解の一面をうけついで、これにより徹底せる規定を與えたことに求められるであらう。それ故に賃銀及び利潤の騰落が生産價格に及ぼす影響を取り扱うにも、投下労働量とは無關係に行われざるをえないのである。結局商品の價值が投下労働量とは無關係に、賃銀、利潤ならびに地代によつて構成されるとするかぎり、マルサスは價值を生産價格に解消したにすぎないのであつて、リカアドオ體系における難點を克服するどころか、かえつてこれを俗流化したのである。

これに反して、ミルは労働量による價值規定を基礎にして、直接的な仕方で平均利潤の事實を形式的に説明し去らうとする試みを示している。知られるとおりミルのブドー酒價格の説明はこうした努力の所産である。いまこれを要約してみよう。一般にブドー酒の生産には技術上労働期間を超える一定の生産期間が必要であるから、ブドー酒の生産に投ぜられた資本は他の生産領域における諸資本との競争を通じて、當然平均利潤による一定の價格の補償をうける。すなわち他の領域で生産された剩餘價值の一部が、労働の直接的搾取に不利な地位にある資本にたいし、その資本の單なる大いさに比例して移轉されるのである。この現象をミルは價值規定から形式的に一貫させようとして、「穴藏にいれられたブドー酒が一年間貯藏せられたことによつて價格において十分の一だけ増加されるとすれば、十分の一だけより多い労働がそれに支出されたものとみなされてよいだらう」と述べる。けれどもこのように特殊の一資本が特殊の領域においてつくる利潤を、それによつて生産された商品の剩餘價值したがつて商品に直接實現された労働量から説明しようとすれば、いわば「存在しないものを存在するものとして説明する」無意味な試みとならざる

をえない。何故ならばこの利益の補償という問題は、剩餘價值あるいは利潤の生産の問題ではなく、これが種々の異なる資本の間に分配されるところの問題であり、いかにすれば一般的利潤率の成立と價值の生産價格への轉化の問題であつて、したがつて價值の決定とは無關係な事柄であるからである。³⁾

しかし一方においてミルは、賃銀の一般的騰貴が有機的構成を異にする諸資本に與える影響の問題をとりあげて、生産部門の三つの場合を想定している。³⁹⁾ すなわち、第一の場合は可變資本一、〇〇〇ボンドのみが投ぜられ、第二の場合は不變資本と可變資本とにそれぞれ一、〇〇〇ボンドづつが投ぜられ、第三の場合は不變資本一、〇〇〇ボンドだけが投ぜられ、そして一般的利潤率は一〇パーセントだとする。こうした想定のもとで、いま賃銀が五パーセント騰貴したとすれば、第一の場合には利潤一〇〇ボンドが五〇ボンドに減じ、第二の場合には利潤二〇〇ボンドが一五〇ボンドに減じ、そして第三の場合には騰貴すべき賃銀がないから利潤率は變らない。これによつてミルはまづ、賃銀の騰貴による剩餘價值率の低下を説明し、リカードと同様に賃銀と利潤との相反關係を證明しているのである。これについてミルは、賃銀の騰貴後かに第二の場合の利潤率七・五パーセントを一般的利潤率とすれば、第一の場合に屬する商品の生産價格は騰貴し、第三の場合に屬する商品の生産價格は下落すると述べ、しかも諸商品の全體をとつてみれば賃銀の騰貴によつて生ずる生産價格の騰貴と下落とは互に相殺されてしまふという結論をひき出している。ここでミルの明らかにしていることは、賃銀の變動が生産價格に影響を及ぼすということ、しかもその生産價格の總和は賃銀の變動にもかかわらず不變であるということである。後者の點はたしかにリカードの論及しなかつた新しい見解であるにちがいないが、ミルはこれによつて勞働量による價值規定を形式的に一貫させ、修正そのものを否認しようと試みたのである。しかし問題は賃銀の騰落とは無關係に、價值がいかにして生産價格に轉化するかの説明にあるのであり、賃銀の生産價格への影響という問題は、一般的利潤率の成立したがつてまた價值の生産價格への

轉化が與えられた事實として前提された上で、はじめて取り扱われうるものなのである。¹⁰⁾ いづれにしても、リカアドオ體系に固有な矛盾を克服しようとしたミルの試みも、上にみてきたように價值規定をもつて一見これと對立する競争現象を無理に説明しようとして、結局生産價格を價值化する結果となつたのである。

要するにリカアドオをめぐる多くの學者は、價值規定と一見對立する競争の事實というリカアドオの提起した問題を解決するにあたり、前者を後者に解消するか、あるいは逆に後者を前者に形式的に包攝せしめるかのいづれかの立場をとるかにしたがつて、それぞれマルサスに代表されるリカアドオ反對者と、ミルに代表されるリカアドオ後繼者の二群に分れることとなつた。それはこの二つのものを媒介する理論的過程が與えられていないかぎり、當然の展開である。このようにして本稿の最初にあげたリカアドオの體系における缺陷は、これらの人々により解決されなかつたばかりでなく、かえつてリカアドオの體系を俗流化し、そして解體せしめる契機となつたのである。その根本的解決がマルサスの手をまたなければならなかつたことはいうまでもない。

- 註(1) マルサス著玉野井芳郎譯「經濟學における諸定義」岩波文庫版二八一・二九ページ
- (2) マルサス著玉野井芳郎譯「價值尺度論」岩波文庫版二三ページ
- (3) Marx, "Theorien über den Mehrwert", III S. 6 (邦譯改造社全集版第十一卷二三ページ)
- (4) Marx, a. a. O., III S. 4 (二二ページ)
- (5) マルサス「價值尺度論」一六ページ
- (6) 玉野井芳郎「ジエームズ・ミルの經濟學」東北大學研究年報(經濟學)十七、十八合併號所載二ページ
- (7) Marx, a. a. O., S. 97 (前掲譯書一〇八ページ)
- (8) 玉野井芳郎前掲論文五ページ

リカアドにおける價值論の修正について 石垣

- (6) James Mill, "Elements of Political Economy" 3 rd. ed. 1844 pp. 106—113 (渡邊輝雄譯九〇ページ)
- (7) Marx, "Kapital" Bd. III S. 230 (總譯書一二二ページ)